

令和元年度 国際総合科学群

教学 I R 実施報告書

令和元年度 教学 I R 取組事項

1. 入学から卒業後までのアンケートをつないだ経時的な分析…………… 1

<取組概要>

昨年度に引き続き、「新入生アンケート」、「カリキュラム評価アンケート」、「卒業生アンケート」の3つのアンケートに国際総合科学部で特に重視する教育理念に関する共通の設問に対する回答結果について分析した。また、分析結果について、各種会議にて報告を行うとともに、結果を各学部教授会での報告・共有し、各学部におけるカリキュラム改善を支援した。

2. 教学 IR 検討 WG における認証評価に向けた対応…………… 4

<取組概要>

令和3年の大学機関別認証評価受審に向け、認証評価において新たにデータ分析が必要となる3つの観点について、解析及び課題解決に向けた検討が進められた。教学 IR 検討 WG にて解析した結果について各学部会議体にて報告を行うとともに、結果を各学部教授会での報告・共有し、各学部においてそれぞれの課題が確認された。

3. 教学比較 IR コモンズへの入り会い…………… 6

<取組概要>

学生データの効率的な収集及び他大学との比較のため、教学比較 IR コモンズに入り会いし、1年次、3年次の学生に対しアンケート調査を行った。調査結果について、教学比較 IR コモンズ全体の解析結果はコモンズ事務局より提示され、令和2年度に各学部へ内容を報告・共有する。

1. 入学から卒業後までのアンケートをつないだ経時的な分析

(1) 実施内容

昨年度に引き続き、「新入生アンケート」、「カリキュラム評価アンケート」、「卒業生アンケート」の3つのアンケートに国際総合科学部で特に重視する教育理念に関する共通の設問に対する回答結果について学部（学系）別に分析した。

<共通で設置した設問>

「(1)とても身についた」～「(4)ほとんど身につかなかった」の4段階で回答

- ・自ら課題を見つけ、それを論理的に解決できる能力が身に付きましたか。
- ・豊かな教養が身に付きましたか。
- ・高い専門的能力が身に付きましたか。
- ・国際的視野が身に付きましたか。

(2) 分析結果の報告

解析結果について、各種会議にて報告を行うとともに、結果を各学系会議での報告・共有し、各学部におけるカリキュラム改善を支援した。

○学長諮問会議（10月29日）

○教学IR検討WG（11月21日）

○各学部教授会（11～12月開催）

(3) 添付資料

- ・ 分析結果（2～3ページ）

入学から卒業後までのアンケートをつないだ経時的な分析

令和元年度分析結果について

1 趣旨

平成 30 年度より、国際総合科学群教学 IR では、国際総合科学部で特に重視する教育理念に関して、入学時、卒業時、卒後 3 年に実施するアンケートに設置された共通設問の回答結果を分析し、経時的な変化を確認する取り組みを開始しました。経時的な分析について、今年度の解析を実施しましたので報告いたします。

2 分析対象データ

- ・ 新入生アンケート
実施期間：平成 31 年 4 月
回答数 : 756 名
- ・ カリキュラム評価アンケート
実施期間：平成 31 年 3 月
回答数 : 625 名
- ・ 卒業生アンケート
実施期間：平成 30 年 8 月～平成 31 年 1 月
回答数 : 148 名

3 分析結果

次ページ参照

各アンケートをつないだ分析（全学）

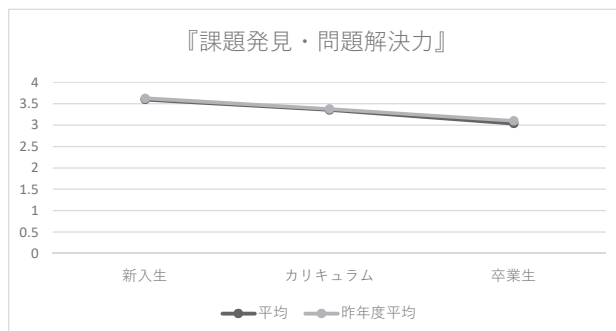
<分析結果>

平成30年度解析結果と比較し、各項目の回答は概ね同じ傾向となった。経年変化に着目すると、『課題発見・問題解決力』、『豊かな教養』、『確かな専門性』については、徐々に右肩下がりの結果となっており、左記2項目が仕事で十分に役立てられていない、または大学で専攻した内容と実際の業務が結びついていない等の原因が推測されるため、専攻と進路の相関関係の調査可否について確認を行う。

一方、『グローバルな視野』については右肩下がりであるが、それぞれの期間の平均値の差が比較的小さく、『グローバルな視野』という点については他の2項目より学生の満足度が高いと推測される。

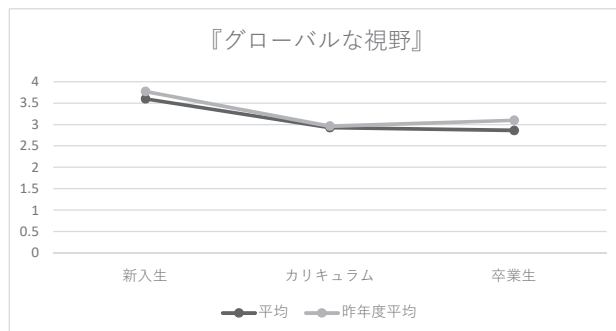
『課題発見・問題解決力』

	新入生		カリキュラム		卒業生	
	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)
4	528	69.841	277	44.320	49	33.108
3	199	26.323	307	49.120	59	39.865
2	7	0.926	27	4.320	28	18.919
1	0	0.000	14	2.240	7	4.730
回答なし	22	2.910	0	0.000	5	3.378
総計	756		625		148	
平均	3.602		3.355		3.041	
昨年度平均	3.627		3.379		3.103	



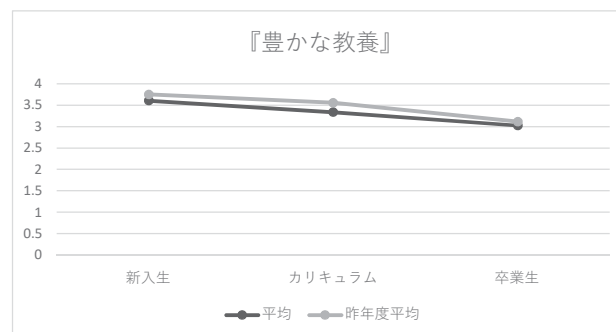
『グローバルな視野』

	新入生		カリキュラム		卒業生	
	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)
4	573	75.794	187	29.920	13	8.784
3	143	18.915	261	41.760	44	29.730
2	18	2.381	123	19.680	51	34.459
1	2	0.265	54	8.640	36	24.324
回答なし	20	2.646	0	0.000	4	2.703
総計	756		625		148	
平均	3.602		2.930		2.865	
昨年度平均	3.774		2.963		3.103	



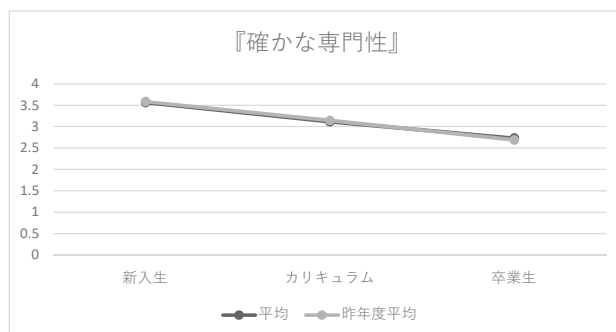
『豊かな教養』

	新入生		カリキュラム		卒業生	
	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)
4	528	69.841	276	44.160	42	28.378
3	196	25.926	296	47.360	71	47.973
2	14	1.852	41	6.560	26	17.568
1	0	0.000	12	1.920	5	3.378
回答なし	18	2.381	0	0.000	4	2.703
総計	756		625		148	
平均	3.608		3.338		3.027	
昨年度平均	3.753		3.556		3.118	



『確かな専門性』

	新入生		カリキュラム		卒業生	
	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)
4	497	65.741	207	33.12	22	14.865
3	221	29.233	306	48.96	54	36.486
2	21	2.778	88	14.08	50	33.784
1	0	0.000	24	3.84	18	12.162
回答なし	17	2.249	0	0.000	4	2.703
総計	756		625		148	
平均	3.562		3.114		2.730	
昨年度平均	3.586		3.142		2.691	



2. 教学 IR 検討 WG における認証評価に向けた対応

(1) 実施内容

令和3年の大学機関別認証評価受審に向け、過去本学で受審した実績のある「大学改革支援・学位授与機構」の評価項目のうち、新たにデータ分析が必要となる下記3つの観点について、解析及び課題解決に向けた検討を進めた。教学 IR 検討 WG にて解析した結果について各学部会議体にて報告を行うとともに、結果を各学部教授会での報告・共有し、各学部においてそれぞれの課題が確認された。

なお、本学において次期の大学機関別認証評価の評価機関として、「大学教育質保証・評価センター」が選出されたが、下記3つの観点については、課題解決に向けた検討が進められており、今後取り組みを継続する。

<教学 IR 検討 WG で取り組む3つの観点>

- ① 「各授業の内容が授与する学位に相応しい水準となっていること」
- ② 「成績評価や単位認定が厳格かつ客観的に行われていることの組織的確認」
- ③ 学修成果の可視化

(2) 解析及び検討状況

① 「各授業の内容が授与する学位に相応しい水準となっていること」

平成30年度シラバス及び授業評価アンケートのデータを用い、「授業外学修時間」に関する現状分析を行い、アクティブラーニングとの相関を調査した。アクティブラーニング類型との相関はあると回答している学部があるなかで、相関がないと回答している学部もあり、またそれぞれの学部で相関があると考えられるアクティブラーニングの類型が違う状況であった。

また、シラバスの分析も実施し、授業外学修時間が比較的長い科目についての特長や、全体的な問題点を明らかにし、次年度以降の「シラバス作成要領」の改善に向けて、FD・SD推進委員会に分析結果の報告と「シラバス作成要領」改善に向けた検討依頼を行った。

② 「各授業の内容が授与する学位に相応しい水準となっていること」

本学における成績評価の現状把握のため、平成30年度の成績データを用い、成績分布の確認を行った。成績分布を各学部で確認したところ、多くの学部にて、成績評価における科目間のばらつきが指摘され、成績評価のルールや指針の検討が必要という意見が挙げられた。成績評価のルール策定について、他大学の実施状況を各大学ホームページより調査し、本学の成績ルールの在り方や、試行実施について検討が進められている。

③ 学修成果の可視化

大阪市立大学の開発した「OCU 指標」を参考にした指標を開発するため、令和元年度は共通教養科目も足掛かりに、6 項目の学修成果に対する成果配分の検討とレーダーチャートの試作を行った。

(3) WG開催実績

- 第3回 令和元年7月10日
- 第4回 令和元年10月4日
- 第5回 令和元年11月21日
- 第6回 令和2年2月17日

3 教学比較 IR コモンズへの入り会い

(1) 教学比較 IR コモンズについて

教学比較 IR コモンズは、入り会いの各大学における学生の学修行動の比較調査とその分析、そして教学関連の情報を比較閲覧するためのデータベース構築とその提供を行っている組織であり、令和元年度は 21 大学が加盟している。本学でも効率的なデータ集約と他大学比較を目的に令和元年に入会することとした。

<入り会い大学>

- ・ 大妻女子大学
- ・ 岡山大学
- ・ お茶の水女子大学
- ・ 嘉悦大学
- ・ 川崎医科大学
- ・ 京都女子大学
- ・ 金城学院大学
- ・ 就実大学
- ・ 椙山女学園大学
- ・ 共立女子大学・共立女子短期大学
- ・ 津田塾大学
- ・ 帝京大学
- ・ 田園調布学園大学
- ・ 東京女子大学
- ・ 長崎県立大学
- ・ 日本女子大学
- ・ フェリス女学院大学
- ・ 宮城大学
- ・ 明星大学
- ・ 横浜商科大学

(2) ALCS 学修行動比較調査について

教学比較 IR コモンズに加入する各大学の 1 及び 3 学年に対し、共通の設問 (80 問) について実施する。学生はインターネット上から調査期間中いつでも回答することができるため、授業時間に実施する必要がなく、また、教員が関与することなく調査の実施及び集計が可能であり、調査結果についてコモンズに加入する他大学と比較することが可能である。本調査については、令和 2 年度以降も参加する予定である。

(3) 添付資料

(4) ALCS 学修行動比較調査 2019 結果梗概 (7 ~ 8 ページ)

大学間の中間活動体である教学比較IRコモンズでは、2015年からコモンズ参加大学において共通のウェブ・サーベイを用いた学修行動比較調査を実施しています。その結果は参加各大学において個別にそれぞれの目的に適った分析がおこなわれると共に、参加大学内で適宜有用性を判断しつつ比較分析・検討が施されています。ここでは調査実施母体である教学比較IRコモンズとして、個別大学に抛らず、有効回収基準を充たした全学生を総計した結果の一端について公開します。

今回は5年目の調査です。参加大学は22大学、2万人の大学生たちが寄せた回答結果から、またいくつもの発見と確認ができました。

なお、その他の結果や情報、方法の詳細についてはコモンズのwebページ（Google検索などで「教学比較IR」と）をご覧ください。

この枠内と右に示した結果は2019年に実施したALCS調査全体のデータ諸元です。

実査期間（全体）2019年7月～2020年2月

調査実施方法 ALCS独自のスマート・ウェブ・サーベイ

調査大学数 22

有効回収数 20009

有効回収とは80設問への回答率が60%以上等、ALCSの有効回収3基準を満たした回収

回答者学年構成 1年生63% 3年生37% 1、3年生間での比率

性別構成 男性28% 女性72%

20009
名

有効回収数

54%

回収率

22大学間平均

93%

全回収数中の有効回収率

この調査は1、3年生を調査対象にすることを基本にしていますが、大学によっては別の学年でも実施しています。

参加大学（名称の50音順）大妻女子大学 岡山大学 お茶の水女子大学 嘉悦大学 川崎医科大学 京都看護大学 京都女子大学 共立女子大学 金城学院大学 就実大学 椋山女子大学 津田塾大学 帝京大学 田園調布学園大学 東京女子大学 長崎県立大学 奈良女子大学 日本女子大学 フェリス学院大学 宮城大学 横浜市立大学 横浜商科大学

経験 大学の授業や学びに関する経験

以下4つの設問群の箱ひげ図は調査比較対象各大学の1・3年生それぞれの各設問スコアリング・データ*の平均値を用い、それらを1年生の中央値の大なる順に設問ごとに表出した結果です。

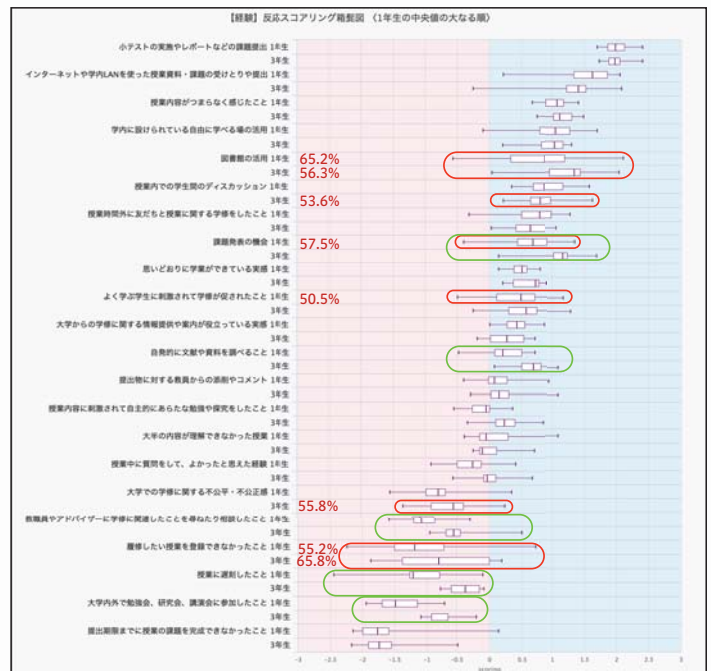
加えて、2年間の修学の結果として1-3年生間に明白な差異が認められた設問、すなわち二種の統計検定（U検定とWelchT検定）により両検定結果において相対的に大きな効果量が認められた設問*を緑色の枠で囲みました。また、比較対象になった大学のうち1、3両学年を調査した20大学各学年相互の設問毎190対について二種の統計検定（同上）をおこない同様に半数以上の対で大きな効果量を示し、統計的に有意な差異が認められた（つまり諸大学間での差異が顕著であった）設問は赤枠で示し、その有意差対の比較全組合せに占めた割合を%で記しました。

「経験」群は他の設問群に比してひげや箱の幅が相対的に大きく、学修関連の経験の多寡には大学間差異が比較的大きく、一目でわかります。

箱の幅が大きい項目は大学間の差異が大きいことをあらわす目安です。なかでも赤枠の部分に統計的に有意な差異が確認された設問ですから、これらについてとくに自大学の位置づけを確かめ、その結果に対する解釈と評価、その結果としての対応が求められるところでしょう。

諸大学間差異が目立った「履修したい授業が履修できなかった」は大学の規模に依存する結果ですから容易には対応しがたいところでしょうが、同規模大学との差異は確認したいところです。「学生間のディスカッション」や「課題発表の機会」あるいは「図書館活用」などでのポジションは、学生主体の学修やアクティブ・ラーニングとの関係性において注視すべき箇所です。

対応にあたっては自大学よりも有意に高い評価を得ている大学の施策や実際のありようが第一の探究課題になります。それはこの比較IRコモンズの場合を連携的な内部質保証に活かしていく典型的な方策でもあります。



成長 入学時からの成長感

全体にひげが肯定域にあります。大学によらず平均的には1年次秋において、すでに入学来の成長感が表明されています。1-3年生間では20設問中15問、75%について統計的に意味のある大きな効果量を認め、2年間の修学成果ともいえる成長感が得られていることが確認できました。

多様な大学が加わった調査にもかかわらず、1学年の1項目以外は、大学間差異は顕著には認められませんでした。例外となった1項（「英語以外の外国語の運用力」）は大学によってはそもそもカリキュラム自体に英語以外の外国語授業の設置がなかったり重視していない場合があることから、それがそのまま反映されただけの結果といえるでしょう。

もっとも成長感については大学の教育のみならず、青年期の自然な発達に対する自覚も組み込まれた評価になっていることは勘案すべきところです。

例年のことながら、こうした全体の傾性に反して3年生において成長感に衰退傾向が表明された設問がありました。「英語の運用力」です。この箱ひげについては、右ひげがとりわけ長い点も注目できます。つまり、最大値ないし上位評価において他の大方の大学と異なる大学があるということです。こうした特徴ある大学の秘密に迫ることは他の大学にとって共通の関心事であるといえるでしょう。



*スコアリング・データの生成法および箱ひげ図、有意差検定についての詳細はコモンズウェブ・サイト <https://cmpir.com>の説明をご覧ください。

時間 日あたり、または週あたり平均値

大学生が学びやアルバイトに費やしている時間数は世間的にも何かと注目されています。そのこともあってか、回答に際しても以前に比べると多少気づかった反応がなされるようになったのかもしれませんが、また、本年度あらたに調査に加わった大学での回答の影響もあったかもしれません。すべての項目、学年においてこれら時間数の調査全大学における平均値が延びました。

授業外の学修時間については、調査以来はじめて両学年ともに日あたり時間換算で多くの大学での授業時間1コマ相当の時間を超えた値が示されました。ALCSでは学びの時間については週あたりと日あたりで直接、時間数を尋ねる設問を設定し、学生にしやすい方で回答を求めています。この方法によって週あたりに学びをしているであろう日数も割り出しています（念を入れて設問でそれに関連した日数を直接記述する質問も設けて検証）。それによるとその平均日数は4.25日（むろん大学によってその値は相違）、したがって週あたりの授業外学修時間数は平均約401分、つまり6.7時間という値がみえてきます。

少し以前、全国的な学生調査などで米国の大学生の授業に関する授業外の学修時間について、日本の学生は1~5時間が大勢を占め、それに対して米国では6~10時間が最も多いといった結果が帯グラフなどと共に示され、「こんなに勉強しない日本の学生」といったマスメディアの喜びそうな言説が流布したことがありました。しかし、それにはそもそもその調査で設定されていた段階評定の区分の仕方の問題もありましたし、それをベースに区間度数を帯グラフなどで並べ比較したり、果ては区間平均をとって日本は3時間に対して米国は8時間などといった誤った判断も誘発しました。しかし、そうした誤りも結果的には災いが福と転じたのかもしれませんが、つまり、それを契機に、大学全般にもっと学んでいる大学生活を当たり前のこととして認めようという雰囲気づくりができたといえそうだからです。実際、本年度の結果をみると、相変わらずバイトに勤しみ、しかし勉強にもそれなりに取り組んでいるという現代大学生の姿があらわれています。

授業外学修時間

1年生 **92**
分 / 日

3年生 **97**
分 / 日

授業に関連しない学習時間

1年生 **45**
分 / 日

3年生 **78**
分 / 日

アルバイトなどの就労時間

1年生 **13 14**
時間 分 / 週

3年生 **14 09**
時間 分 / 週

満足 教学に関わる満足度

「満足」群ではほぼ全項目で各大学の平均値が肯定域に入りました。設問間の相対差異もあまりないことから「総じて満足」という無難な学生生活の日常が映し出されています。この傾向は毎年かわりません。ただし、まさにその「総合的にみた大学での学び」という設問に対する満足度は、とくに約2年半を過ごした3年生からの回答において諸大学間差異が半数以上の比較対で統計的に有意差をもって表出していることもわかりました。絶対的な評定でみれば概ね満足しているが、その満足感には大学間で明白な開きがあるということです。

同様に、いずれも大学で過ごした時間が長い3年生において「学内の雰囲気や居心地、環境」「一般的な教室の設備や使用感」「大学の授業の質」「学費に比した授業内容」に大学間差異が明確にあらわれました。ファシリティについては有意に高評価の大学の実際をうかがうことが、直接的に改善の参考になるはずですが。コストパフォーマンスについては国公立と私学が共に入った調査であることの影響が当然にでていますが、同じ設置者のなかで有意差が認められるとすれば、その原因は探るべきところでしょう。問題は学生からの「授業の質」についての評定で、大学間に格差が見出された点です。この点の確認と検証は見逃すことができません。

例年変わらず「事務スタッフの応対」への回答が、大方の大学で共通し、3年生で顕著に満足感を落しています。初年次での対応が厚いことによる相対差によるものと解釈できるところですが、諸要因考えられ、探るべきところでしょう。



希望 在学中に望むこと

設問「希望」群の最大の特徴はすべての設問において諸大学間での差異が顕著には認められなかったことです。むろん、ここで顕著とは大学間相互の総当たり比較対の半数以上で統計的な有意差が認められた場合のことですから、有意差のなかった大学対がなかったということではありません。個別大学間の差異については公開の範囲を超えるためここでは立ち入りません。

3年生は回答時点での残りの大学生活が1年あまりです。よって入学初年次に比して在学中への望みは全般に低下します。その傾向は設問全般に認められますが、とくに「資格取得」「外国語運用能力」「ボランティア活動」「起業意識形成」「短期留学」といった具体的な実践を伴う学修に対する関心は1年次に比してははっきりと低下することが認められました。

また、例年のことですが、このように多様な大学の総合された回答の絶対的な値をみるかぎり、海外留学や起業意識の涵養、あるいは能動学習の典型ともいえるチーム学習などに対する大方の学生の望みは、大学側（というより実際は大学周辺の思いというべきか）が力を入れようとするほどには強くはないことが鮮明にわかります。むしろ大学の現場は学外のステークホルダーや省内官僚の見識と、この現実の大学生のあいだに立って戸惑っているという構図がこの結果から浮かんできます。実際の学生たちの大勢は、まるで昭和の時代の大学を思わせるような「幅広い知識や教養」あるいは「専門知を十分に学ぶ」ことに、最も強い望みをもって大学生活を送っているようです。

